三和中央病院

医療法人 清潮会 三和中央病院　広報誌　２００９年７月発行　No.3

POCO a POCO

（ポコ・ア・ポコ）

発行人：塚崎　稔　　発行所：長崎県長崎市布巻町165-1
TEL 095-898-7511・FAX 095-898-7588
http://www.sanwa.or.jp
印　刷：昭英印刷有限会社　長崎市平野町13-13　TEL 095-844-0231

POCO a POCO（ポコ・ア・ポコ）とは…
ポコ・ア・ポコとは少しずつという意味があり、何事も少しずつ、徐々に良くなっていければなとの思いを込めてみました。

基本理念　安心できる、こころ温まる医療

●基本方針
1．私たちは誠実で親切な心をもって医療に従事します。　2．私たちは人権を尊重した良質な医療を提供します。　3．私たちは地域精神医療と地域ケアを実践していきます。

三和中央病院の基本理念「安心できる、こころ温まる医療」について

医療法人清潮会三和中央病院
理事長　塚崎　寛

私たちの職場は「病院」であります。病院であるからには、もちろん病んでいらっしゃる患者さんに「医療」を提供し「治療」を受ける場であります。そこで今回は、その提供させて頂いている「医療」「安心できる心温まる医療」とは？皆様と一緒に再考してみませんか。

患者さんは身体的や精神的に病を患い病院へいらっしゃるから患者さんなんですが、誰しも病院という所を好きな方はいませんね。早く治って自分の社会環境へ一刻も早く戻りたいというのが本音だと思います。中には自分自身がおかれる社会環境や人間関係などで悩み、疲れて病院へという環境の中に救いを求めていらっしゃる方もいますが、いずれにしても「安心」を求めている事には変わりありません。人は自分を取り巻く様々な環境と異なる所にいると、誰しも不安になります。その不安を取り除き、安心して頂くには、どう対応すればよいのか？私たち医療人は治療の前に第１番目にその点から自問していくべきでしょう。

医療関係の仕事に従事されている皆さんは何人もの患者さんに直接あるいは間接的に接している訳ですが、相手の立場になって接して来ましたか？そんな事は当然分かっているとお叱りが返ってくる事でしょう。私たち医療人は診る、看る側として相手より自身が優位に立っていませんか？診てあげている、看てあげているという、いつの間にか気づかない内に一瞬でも、そのような態度になった事はありませんか？ついつい日常の忙しい業務の中でそのような態度は私たちは気づかなくとも、不安を抱えていらっしゃる患者さんにはより一層の不安を抱えることになります。そうなると患者さんはいつまでも心を開いて頂けませんし次のステップである治療へとスムーズに進んで行けない訳です。まずは、私たち医療人が無意識に持っているかもしれない特有の「おごり」を時々、自問することを心がける様にしてみてはいかがでしょうか。不安になると患者さんは、そのような医療人の「おごり」を見抜き、心閉ざし、ひいては相手を嫌いになり時には反発的な態度さえ示すはずです。それに気づかない医療人は、あの人は苦手だとか、いやだとかと医療人とは思えない言葉、態度となりかねません。まさしく本末転倒です。お互いの心を通わせる事が治療の第一歩だと思います。ちょっと難しい事ですが私たちは絶えず自問しチャレンジしましょう。

今後、当院の基本理念である「安心できるこころ温まる医療」の実践のため、患者さん主体の人権重視の医療を目指し、地域医療を実践していくことを目標とします。その目標達成のために患者さんへのサービスの向上のため、スピリチュアルケースワーカー、ケアワーカー、カウンセリングナースや内観療法などの研修を行い、心のケアに対応できる職員育成や作業療法、理学療法、デイケア、訪問看護の各部の人的充実と新規プログラムの作成。「安心できる医療」の提供のため事故防止の徹底、看護体制を見直し看護基準のアップ、地域への啓蒙活動、地域連携機能の強化、社会復帰施設整備、サテライト外来の開設、情報管理機能の強化などを、当院の今後の目標として掲げ、医療の質の向上のため努力していく所存です。

三和中央病院 入院認知症講演会が開催されました

さる1月20日、医療法人清潮会の創立40周年記念講演として「入院認知症講演会」が開催されました。第一部は当院副院長、岩田信之先生による「入院認知症」の講演。第二部は多職種専門スタッフによるBPSD（認知症の行動と心理症状）をテーマとしたシンポジウムが行われました。

第一部では認知症の専門医とは、BPSDの主因である幻覚・妄想の診方・考え方、抗精神病薬の投与法などの講演があり、第二部では医師、看護師、栄養士、OT、老人施設等の多職種の方々のそれぞれの立場から現状や貴重なご意見を頂きました。夜の講演会にもかかわらず、約350名の参加がありました。ありがとうございました。

第２部シンポジウムでの座長をつとめましたが、不慣れなため、フロアの参加者の方々を見渡す余裕もなく、聞き苦しかったのでは？と反省しております。しかし貴重な体験ができ、内容深いシンポジウムであり、今後の仕事をする上で、役立つことと思います。協力してくださった、多数のスタッフの方々、本当にありがとうございました。　北３病棟師長　松尾貴代美

超高齢化社会に伴い認知症の知識や対応がとても重要となり、岩田副院長の講演や多職種によるシンポジウムを通して貴重な意見を聞く事が出来た。チーム医療において多職種の方々からの情報を元に各々の患者様に対してのQOLの向上を目指し、私もチーム医療の一スタッフとして患者様本位の看護を行い、看護師としての役割を踏まえ専門性を生かしていきたい。
南３病棟看護師　山口　里美

岩田信之副院長

シンポジウム

会場の様子

Column（コラム）①

『医療と映画』

三和中央病院副院長　岩田　信之

「ため」になる映画が名画かどうかは別として、当院で仕事をしていく上で役に立つ映画を御案内します。DVDでも充分楽しめて、何といっても、おもしろく観れます。まずは、精神科病院の諸問題が「てんこもり」で、名優の名演技がみられる『**レナードの朝**』。パーキンソンと抗パ剤も出てきます。「人にはいろいろな事情がある」という事がわかる邦画の『**切腹**』。黒澤明の『**生きる**』と並ぶ日本の名画です。癌の告知を受ける患者さんには日米の差はないとわかる『**ドクター**』。子供の病気を治せる医者は自分で探し出す『**誤診**』。「PTSDとはこんなものなのか」と思わせる『**フィアレス**』。日米・諸外国の医療事情について考えさせられるドキュメンタリー映画の『**シッコ**』。DOA（到着時死亡）の最終治療をどこまでやるのか、邦画の『**お葬式**』。日本では応募者が少ない臨床治験の被検者について考えさせられる『**ナイロビの蜂**』。最後に、阿呆な者に我慢して・気をつかって付き合うと、酷い目にあう『**オープンウォーター**』、『**オープンウォーター２**』。以上の私のコメントは、必ずしも、各映画の主題ではありません。一応、お断りしておきます。映画の楽しみ方は一通りではありません。私のコメントもその一部に過ぎません。映画は総合芸術であり、娯楽でもあり、フレキシブルなもの。日頃の専門職の仕事を、しばし忘れて、映画を楽しんでください。「１本しか観れない」という事なら、老年期病棟のスタッフには、『**切腹**』をお勧めします。私以外の医師では、当院の図書室にある総合診療・医学雑誌のJIMの2007（17巻）－７月号から、熊本大学医学部の浅井篤という先生が、『シネマ解題』と題して、映画の話を毎号に掲載しています。これを機会にちょっと図書室をのぞいてみたら如何でしょうか。

第21回九州アルコール関連問題学会が開催されました

さる３月６日～７日の２日間、第21回九州アルコール関連問題学会が長崎で開催されました。当院塚崎稔院長が大会委員長を務め、九州内外からたくさんの参加者がありました。

初日は５つの分科会でそれぞれのテーマに沿って発表や意見交換が行われました。２日目は当院でも依存症の治療プログラムとして取り入れている「内観」についての「内観療法談義」が行われ、桜が丘病院の赤木健利院長を座長に迎え、指宿竹元病院の竹元隆洋院長と当院塚崎稔院長が講師を務めて頂き「内観」の魅力について貴重なお話を聞く事ができました。また舞台上での模擬内観もありました。

本学会は「日本アルコール関連問題学会」の九州地方会として発足。アルコール依存症の治療や、その周辺にかかわる医療・保健・福祉・教育・司法等の広い分野から研究、研修の場として例年九州各地で開催されている。長崎では３回目の開催となり、今回は塚崎院長が大会長となって１年前から準備を始めた。月１回の実行委員会で県内の医療、行政等の関係機関から協力を得て、成功裡に終える事が出来た。　　医療社会福祉部部長　梁瀬　健一

第１～５分科会に分かれアルコール問題について熱心な話し合いがありました。どの病院でも患者様のニーズに対応したプログラムを取り入れ、様々な工夫で取り組んでいる事がわかりました。当院では昨年末より「女性ミーティング」を立ち上げました。他院の同様なミーティングがあるのを知り、お互いに意見交換ができ、とても参考になりました。今後、仕事をする上で役立つ貴重な大会であったと思いました。　　西２病棟看護師　坂本　光枝

分科会

内観療法談義

模擬内観

Column（コラム）②

2000年前後の数年間、長崎県精神保健福祉協会の広報誌「らいふ」に連載していた『コラム・地平線』を、ポコ・ア・ポコ誌上で再開してみることにしました。よろしくお付き合いください。

『マスク考』　三和中央病院副院長　松本　喜代隆

新型インフルエンザに関する報道の一部で、日本人の過剰なマスク着用がとりあげられていたことを、ご記憶のかたも多いと思います。

そのことの是非は別にして、この数年医療現場における医療従事者のマスク着用もまた急激に増加しており、精神科病棟とて例外ではありません。背景には、感染に対する意識の高まりがあり、マスク着用はあるべき当然の姿のように思えます。

しかし、私が天邪鬼だからでしょうか、精神科病棟でマスク顔のスタッフを見かけると、どうしても気になって落ち着きません。マスクを、「本日、コミュニケーション拒否」のサインとひそかに受けとめる患者さんがいるのではないかと、とても気になるのです。

感染予防の観点からは、早め早めのマスク使用は医療従事者として正しい行動とは思うのですが、精神科病棟においては、そこに精神科的配慮や考察が必要だと思うのです。患者さんにとって、顔の見えない（表情がわからない）コミュニケーションは、怖いのではないか、患者さんの方がスタッフに気を使って、今日話したいことも遠慮して言わないのではないか。
必要に応じてマスクを着用するとしても、顔を見せる（安心を与える）ということと、感染対策のためにマスクを着用するという二つは、天秤にかけられるべき二つであって、その繊細なつりあいの上に立って、つまり迷いがあった上で選ばれたマスクであってほしいなと思います。

はるか昔の研修医時代、外来診察の時は腕時計をはずして診察室に入っていました。診察の途中で、腕時計をチラチラと見るような失礼なことはそもそもしないように気をつけていましたが、知らず知らずに時計の方に視線が行って、私が時間を気にして早く終わりたがっているのではないかといった余計な不安を、患者さんが抱かないように、最初から腕時計をはずしていたのです。

誰か先輩がそうしろと教えてくれたわけではありません。はずすことが、実際の診療に役立ったのかもわかりません。しかし、精神科とはそういう繊細さが必要な診療科なのだと、様々な場面で研修医の私たちは感じていたのでした。

今ですか？今は、意図的に腕時計をチラチラと見たりすることさえ出来るようになりました。そうであるのに、病棟でマスク顔を見ると、当時の繊細さの名残りが心のどこかで点滅します。

病棟紹介 南6病棟

統合失調症、アルコール性認知症、感情障害、精神遅滞などの精神疾患で急性の精神症状が安定し、長期に治療・療養が必要な患者さんが入院している男女混合の精神療養開放病棟です。

朝８時～16時30分まで病棟入口は開扉されており、開放的な環境の中、精神療法、薬物療法、精神科作業療法、日常指導などを行い、ADLや社会生活の質の向上を目指し、治療・看護に当たっています。

病棟スタッフ20名と多職種と協力しながら、新たな気持ちで取り組んでいます。　　南６病棟師長　三石　絹子

ＢＢＱ

「にこにこ会」でのおやつ作り

患者様と職員のミーティング

院内保育園 ひかりのくに

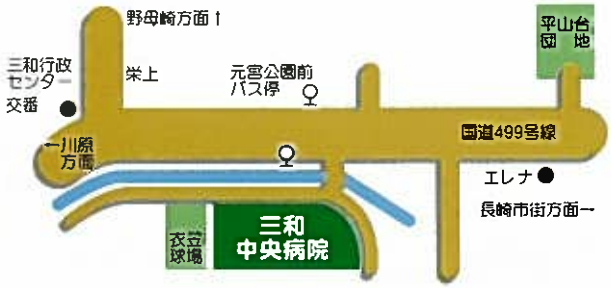
病院の正門を左に曲がり病院の渡り廊下をくぐると子供達の元気な声が聞こえてきます。笑い声、はしゃぐ声、そして泣き声も！

ここが現在園児数35名の院内保育園「ひかりのくに」です。私達保育士の目標とするところは、当院の職員のおかあさん、おとうさんが安心して仕事に専念できること。そして「子供達が日々を楽しく、ときめいて過ごしながら、色んなことができるようになりたい」という気持ちを育てることで～す。

近くの公園までお散歩

真剣にお話を聞いてます

園庭で遊んでいるぼくたち。ミミズもダンゴ虫もおともだち



医療法人 清潮会　三和中央病院
診療科目：精神科・心療内科・内科・歯科
〒851-0494　長崎県長崎市布巻町165-1
TEL 095-898-7511・FAX 095-898-7588
E-mail：info@sanwa.or.jp